

動詞に由来する名詞を含む複合名詞について

瀬田 幸人

本稿は、動詞に由来する派生名詞を含む複合名詞について、主に複合名詞の構成要素間の関係を中心に考察する。まず、複合名詞の構成要素である派生名詞は、その基体動詞の語彙特性を継承すると仮定し、基体動詞の項構造に基づく内項条件を提案する。内項条件によって、動詞に由来する派生名詞でも、接辞の付加を伴う動詞由来名詞と接辞の付加を伴わない動詞的名詞では、複合名詞形成に関してはその振る舞いが違うことを示す。最後に、動詞的名詞を含む複合名詞は、本来の名詞、つまり派生されたものではない名詞で構成される複合名詞と同等に扱い、動詞由来名詞を含む複合名詞は、別枠で扱わなければならないという結論を提示する。

Keywords：複合名詞，動詞由来名詞，動詞的名詞，特質構造

0. はじめに

英語において *fireman*, *honey-bee*, *cable car* のように二つの要素が結合して一つの語として機能するものは一般に複合語 (compound word) と呼ばれる。¹⁾ 複合語の最初の要素は、名詞の他にも、*hothouse*, *she-wolf*, *think tank*, *afternoon* の斜体字に見るように、形容詞、代名詞、動詞、前置詞など様々な要素が可能である。また、右側の要素も、*heart-breaking*, *handmade*, *carsick* の斜体字のように、現在分詞、過去分詞、形容詞などがくることがある。さらに、複合語の構成要素も二つに限らず、*city trash collection*, *infant heat regulation*, *sugar cane plantation owner*, *winter weather skin troubles*, *a New Year Eve fancy dress ball* のように三つ以上の場合もある。

このように、複合語には実に多様な種類があり、構成要素間の関係性という観点からも非常に興味深い言語表現である。瀬田 (2006) では、本来の名詞、つまり派生されたものではない名詞から成る「N+N 複合名詞 (compound noun)」について論じたが、本稿では、そこでは扱わなかった次の例の斜体字に見るような動詞由来名詞 (deverbal noun) や動詞的名詞 (verbal noun) などを構成要素として含む *sunrise*, *sightseeing*, *language teacher*, *chewing gum* のような「N+N 複合名詞」(以下「複合名詞」) に絞って、二つの要素間の関係を中心に論じることにする。²⁾

1. 分類に基づく伝統的な分析

動詞由来名詞や動詞的名詞を含む複合名詞は、本来の名詞で構成される複合名詞の中に含められ、一緒に論じられるのが一般的であった。この節では主なものはいくつか取り上げて概観することにする。

1. 1 Jespersen (MEG) の提案

Jespersen (MEG, VI: 137f.) は、複合名詞は2つの物や概念の間の関係を表すが、その関係を知る方法は明示されていないため文脈などから判断するしかなく、そのため複合名詞の構成要素間の論理的な関係を正確に定義するのは多くの場合に困難であるとした上で、「N+N 複合名詞」(彼の用語では実詞複合語) を6つのタイプに分類している (pp.142ff.)。6つのタイプのうち、最も一般的なものが末尾限定複合語 (final-determinative compound) と呼ばれる複合語であるが、この末尾限定複合語は、例えば *gas-light* に見るように、第2要素 (*light*) が第1要素 (*gas*) によって修飾される関係にある複合語とされ、さらに次の8種類に分けられている。

- (1) a. 第2要素が動作や行為者を表す名詞で、*sunrise*, *daybreak* のように第1要素と第2要素がいわば主語-動詞の関係にあるか、あるいは *childbirth*, *shoe-maker*

のように第1要素が第2要素のいわば目的語の関係にあるもの。

- b. 第1要素が場所を示すもの。e.g. garden-party, headache, land-breeze など。
- c. 第1要素が時間を示すもの。e.g. night-train, evening-star, day-dream など。
- d. 第1要素が第2要素の意図する／意味するものを示すもの。e.g. keyhole, bird-cage, wineglass など。
- e. 第1要素が第2要素が生み出される道具類などを示すもの。e.g. gunshot, footstep, handwriting など。
- f. 第1要素が第2要素に含まれ、第2要素の特徴づけとなるものを示すもの。e.g. feather-bed, sand-paper, newspaper など。
- g. 第1要素が第2要素の似ているものを示すもの。e.g. needle-fish, silver-fox, bell-flower など。
- h. 第1要素が第2要素の素材を示すもの。e.g. gold ring, stone wall など。

さて、上の8種類の中で動詞由来名詞や動詞的名詞が関係するのは (1a) (sunrise, daybreak, child-birth, shoe-maker), (1c) (day-dream), (1e) (gunshot, footstep, handwriting) であり、(1a) は二つの要素間の関係を文法関係で捉えようとしたもので、(1c) と (1e) については、二つの要素間の関係を意味的な関係で捉えようとしていると言える。瀬田(上掲書)でも指摘しているように、このJespersenの分類は、その基準を文法関係が関与するもの、意味関係が関与するもの、色・形の類似性が関与するもの、素材が関与するものなどバラバラで一貫性を欠いたものに置いたため、構成要素間の関係の真の理解にはほど遠いと言えよう。さらに、分類の対象として本来の名詞と動詞由来名詞などのいわば派生された名詞を一緒に扱っている点も問題であると考えられる。後で明らかにされるように、複合名詞の本質と全体像を解明する試みとしては、本来の名詞のみで構成される複合名詞と動詞由来名詞のような派生された名詞を含む複合名詞を区別して考えなければならない。³⁾

1. 2 Adams (1973) の提案

Adams (1973: 60-89) は、Jespersenの分類をさらに精練させて次の11種類に分類して豊富な例を挙げている。

- (2) I. Subject-Verb II. Verb-Object
- III. Appositional IV. Associative
- V. Instrumental VI. Locative
- VII. Resemblance
- VIII. Composition/Form/Contents
- IX. Adjective-Noun X. Names
- XI. Other

これらの分類のうち、特に動詞由来名詞や動詞的名詞が関係するのは、I. Subject-Verb, II. Verb-Object, V. Instrumental, VI. Locativeである。ここで、これらの分類について詳しく見ておくことにしよう。(下の例は、いずれも第1要素に第1強勢が置かれるものに限定した。)

(3) I. Subject - Verb

- A 1. *Noun-verb (zero suffix)* bee sting, snake-bite, sunburn など。
- A 2. *Noun-verb (other nominalization)* blood pressure, population growth など。
- B 1. *Verb(-ing)-noun* cleaning lady, mocking bird など。
- B 2. *Verb(neutral)-noun* call boy, search party, playboy, turntable など。
- B 3. *Verb(nominalization)-noun* demolition squad, reception committee, motion picture など。

II. Verb - Object

- A 1. *Verb(-ing)-noun* drinking-water, reading material, spinning-wheel など。
- A 2. *Verb(neutral)-noun* scatter cushion, flashlight, stop-watch など。
- B 1. *Noun-verb(-ing)* book-binding, hay-making, fault-finding, house-cleaning など。
- B 2. *Noun-verb (zero suffix)* gear shift, hair-do, car park, handshake など。
- B 3. *Noun-verb(-er)* grave-digger, screw-driver, shoe-maker, record-player など。
- B 4. *Noun-verb (other nominalization)* manslaughter, mail delivery, life insurance など。

V. Instrumental

- A 1. *Verb(-ing) - instrument-noun*
reading glasses, carving knife,
wrapping paper, laughing gas,
sleeping pill など。
- A 2. *Verb(neutral) - instrument-noun*
searchlight, grindstone, ignore
character, pass-word など。
- A 3. *Verb(nominalization) - instru-
ment-noun* ignition key, pleasure
boat, protection money, naviga-
tion aid など。
- C 1. *Instrument-noun - verb(-ing)*
action painting, hand weaving,
impulse buying, shadow-boxing,
water-skiing など。
- C 2. *Instrument-noun - verb (zero
suffix)* fingerprint, telephone call,
pipe dream, needlework など。
- C 3. *Instrument-noun - verb (other
nominalization)* heat treatment,
steamroller, lip service, pressure
cooker, fan dancer など。

VI. Locative

- A 1. *Verb(-ing) - locative-noun*
(i) *place* drawing paper, melting
pot, sleeping bag, swim-
ming pool など。
(ii) *time* breathing space, cough-
ing fit など。
- A 2. *Verb(neutral) - locative-noun*
(i) *place* show-room, checkpoint,
watch-tower, dance hall
など。
(ii) *time* wash-day, payday, fast
day, rush hour など。
- A 3. *Verb(nominalization) - locative-
noun*
(i) *place* amusement park, recep-
tion desk, labour camp
など。
(ii) *time* completion date, judg-
ment day, retirement age
など。
- C 1. *Locative-noun - verb(-ing)*
place shop - lifting, window-
shopping, sea-faring など。
- C 2. *Locative-noun - verb (zero suffix)*
(i) *place* bookmark, moonwalk,

field work, table talk など。

(ii) *time* daydream, night work など。

C 3. *Locative-noun - verb(-er)*

(i) *place* school-teacher, cradle-
snatcher, mine-worker,
cave-dweller など。

(ii) *time* night rider, night worker
など。

この Adams の分類で注目すべきは、動詞由来名詞や動詞の名詞のような動詞に関連する名詞を verb (-ing), verb (-er), verb (nominalization), verb (zero suffix) のように形態的に区別して、これらの名詞が含まれる複合名詞を広範囲に渡り網羅している点である。しかしながら、この Adams の提案も Jespersen の場合と同様、例えば spinning-wheel を V. の Instrumental ではなくて II. の Verb - Object に分類するなど、構成要素間の関係を捉えるときの基準がはっきりしていないという点、および複合名詞が生産的であるということの説明に関しての言及がない点などいくつか解決すべき点が残されている。

1. 3 Hatcher (1960) の提案

Hatcher (1960) は、複合名詞の構成要素間の関係を包括的な関係と捉え、§ 1.1 で見た多様な関係を次の 4 種類の関係にまとめることができるとしている。

- (4) a. ① = "A is contained in B"
b. ② = "B is contained in A"
c. $A \rightarrow B$ ("A = Source")
d. $A \leftarrow B$ ("A = Destination")

動詞由来名詞や動詞の名詞のような動詞と関連のある名詞を含む複合名詞に関して言えば、Hatcher (上掲書: 365) は、sunrise などのいわゆる "S+V" の関係が見られるものは "the subject is the 'source' of its own activity" と見做して $A \rightarrow B$ の関係として、また childbirth などのいわゆる "O+V [V+O]" の関係が見られるものについては "[A] is that toward which [B] is directed" として $A \leftarrow B$ の関係としてそれぞれ捉えようとしているが、これには無理がある。"source" という概念を "S+V" の関係にまで広げてしまうと cane sugar のような「B(sugar)はA(cane)から取り出される」という関係との区別がつかなくなってしまう。また、"O+V [V+O]" の関係についても、Destination という概念で捉えようとすれば shoe-string などの関係と同種類と見做すことになり、これは明らかに事実と反する。さらに、

Jespersen や Adams の提案でも取り上げた生産性についての問題は Hatcher の提案にも当てはまる。⁴⁾

2. 統語的な操作を組み入れた分析

2.1 Lees ([1960] 1966) の提案

Lees ([1960] 1966: 124-175) は、複合名詞 (Lees の用語では複合名詞形 (nominal compound)) を様々な文法規則によって文から派生することを提案している。例えば, *wading bird* は下のような過程を経て派生される。

- (5) The bird wades. →
 ...bird which wades... →
 ...bird wading... →
 ...wading bird... →
 ...wading bird...

Lees は、複合名詞の構成要素間の文法関係を以下の 8 つに分類して、具体例を提示しながら派生の仕方について論じている。⁵⁾

- (6) I. Subject - Predicate
 II. Subject - "Middle Object"
 III. Subject - Verb
 IV. Subject - Object
 V. Verb - Object
 VI. Subject - Prepositional Object
 VII. Verb - Prepositional Object
 VIII. Object - Prepositional Object

この中で、動詞由来名詞や動詞的名詞のような動詞と関連する名詞が関係するのは、III. Subject - Verb と V. Verb - Object である。派生の仕方については、生成文法の初期の時代の提案ということもあり、文法規則、とりわけ削除規則の復元可能性の問題など重大な問題を含んでおり現在ではとても受け入れることはできないということを指摘するに留めるが、III. と V. の具体的な例を見ておくことは今後の議論にとっても有効であろう。

(7) III. Subject - Verb

- A. Gerundive Adjective
 talking machine, drying oil, howling monkey, mocking bird, wading bird など。
 B. Verb - Subject
 blowfly, go-cart, crybaby, cutworm, dance team, cover crop, glowworm,

playboy, shuttle train, popcorn, tug-boat, turntable, watchdog, scrub woman など。

C. Subject - Nominalized Verb

1. Of - Periphrasis

- a. Abstracta
 animal life, heartbreak, population growth, snakebite, sunburn など。
 b. Concreta
 bear hug, footstep, mother love, bee sting, nightfall, onion smell など。

2. By - Periphrasis

dealer maintenance, farm production, heat prostration, insurance coverage, plant production, vapor lock など。

D. Nominalized Verb - Subject

assembly plant, investment bank, demolition squad, placement bureau, storage battery, induction center, reception committee など。

V. Verb - Object

A. Infinitival

1. Endocentric
 flashcard, mincemeat, dodge-ball, stopwatch, pull chain, pushbutton など。
 2. Exocentric
 carry-all, picklock, hangdog, cut-throat, pickpocket, do-nothing, turnkey など。

B. For - Adverbial

eating apple, chewing gum, spending money, whipping cream など。

C. Action Nominal

1. With *Ing*
 engine turning, mudslinging, book-binding, fortune hunting, bull fighting, horse racing, sightseeing, child rearing, housecleaning など。
 2. With *Nml*
 a. Abstracta
 birth control, bloodshed, grain storage, childbirth, mail delivery など。
 b. Concreta

achievement test, handshake,
room service, life insurance, book
review など。

3. With *Er*

anteater, safecracker, shoemaker,
householder, lie detector, car
owner, truck driver, mindreader,
weather indicator, coal miner, trou-
blemaker など。

D. Obsolescent Object – Verb

letter drop, disc jockey, lifeguard,
bookmark, milkshake, fishfry,
doorstop など。

2. 2 Levi (1978) の提案

Levi (1978) も Lees ([1960] 1966; 1970) と同様、統語操作によって複合名詞⁶⁾を派生する立場をとっている。彼女の枠組みでは、複合名詞は主要部名詞と節から成る基底構造(名詞句)から統語操作(述語消去/述語名詞化)によって派生されるが、この場合、構成要素間の関係を示す重要な働きをする述語として消去復元可能述語(recoverably deletable predicate)と呼ばれる下の9つの述語が基底構造で設定されている(pp.76-77)。([] 内はそれに相当する伝統的な用語とされる。)

- (8) CAUSE [causative] / HAVE [possessive/dative]
/ MAKE [productive; constitutive, composi-
tional] / USE [instrumental] / BE [essive/appo-
sitional] / IN [locative; spatial or temporal] /
FOR [purposive/benefactive] / FROM
[source/ablative] / ABOUT [topic]

Levi (同書: 172ff.) は、動詞由来名詞や動詞的名詞のような動詞と関連する名詞を含む複合名詞を、下の(9)で示されるように、動詞と関連する名詞の働きと意味によって区分される Act (動作), Product (産物), Agent (動作主), Patient (被動者) の4つのカテゴリーと、その名詞の修飾要素(つまり第1要素)が基底構造で主語であったか目的語であったかによって区分される Subjective (主語的) と Objective (目的語的) の2つのカテゴリーの組み合わせによって分類している。

(9)

	Subjective	Objective
Act	manager attempts, cell decomposition	birth control, heart massage
Product	peer judgments, faculty decisions	stage designs, tuition subsidies
Agent	—	draft dodger, urban planner
Patient	student inventions, city employees	—

このような分析を提案する理由としては、下の(10)と(11)の例文から分かるように、動詞から派生される名詞の意味解釈に違いが生じることが挙げられる。⁷⁾

- (10) a. The amending of constitution took seven years.
b. The constitution amending took seven years.
c. (The act of) amending the constitution took seven years.
d. *The amendment to the constitution took seven years.
e. *The product of (the act of) amending the constitution took seven years.
- (11) a. The amendment to the constitution was a piece of law that satisfied no one.
b. The constitution amendment was a piece of law that satisfied no one.
c. The product of (the act of) amending was a piece of law that satisfied no one.
d. *The amending of the constitution was a piece of law that satisfied no one.
e. *The act of amending the constitution was a piece of law that satisfied no one.

Levi (同書: 176-177) は、このような意味の違いを基底構造に反映させ、例えば *pollution* と *critique* は、下の(12a), (12b) で示されているように、それぞれ Act Nominalization, Product Nominalization という規則によって派生することを提案しているが、現在ではこの種の規則は復元可能性などの点から認められない。とは言え、Act と Product のような区別は、なんらかの形で語彙項目の中に記載しておく必要はあると思われるが、これについては後述する。

- (12) a. /ACT/ ## pollute by industry of water ##
⇒ *pollution* by industry of water < Act
Nominalization >

- b. /PRODUCT/ ## criticize by students of music ## \Rightarrow *critique* by students of music < Product Nominalization >

3. 語彙 - 機能文法による分析

Selkirk (1982) は, Bresnan (1982) で提示された語彙 - 機能文法 (lexical-functional grammar) の枠組みで, 動詞に由来する名詞を含む複合名詞について論じている。Selkirk (上掲書: 23) は, 動詞から派生する名詞が主要部 (William (1981: 248) で提案された右側主要部規則 (Righthand Head Rule) を採用している) で, それ以外の要素が主要部に対して Agent, Theme, Goal, Source, Instrument のような主題関係を持つ文法項である複合名詞を特に「動詞由来複合語」(verbal compounds) と呼び, 例えば下の (13) のような複合名詞とは区別している。また, 動詞由来複合語の例を (14) のように接辞ごとに分けて提示している。⁸⁾

- (13) party drinker, spring-cleaning, concert singer

(14) *Nouns*

- *er*: time-saver, cake baker, schoolteacher
- *ing*: housecleaning, tin mining, well-being
- *ance*: slum clearance, surface adherence
- (*a*)*tion*: consumer protection, character assassination, self-deception
- *ment*: troop deployment, task assignment, uranium enrichment
- *al*: property appraisal, trash removal

Selkirk (同書: 32-33) は, さらに, 複合名詞の統語構造において主要部以外の名詞に随意的に文法機能を付与することを提案する。下の (15a) は文法機能 (OBJ) が付与された場合の構造で, (15b) は付与されなかった場合の構造とされる。次に, 動詞に由来する名詞 (devouring, eating) の語彙形式 (17) は, それらの名詞の基になる動詞 (devour, eat), つまり基体動詞の語彙形式 (16) に依存すると仮定するため, 文法機能の同定 (この場合は Theme への OBJ, OBJ/φ の付与) は派生名詞にも継承されることになる。これによって, 例えば tree eater/eating の構造は (15a) と (15b) のいずれも可能であるが, tree devourer/devouring の構造は (15a) のみであることが説明できるとする。

- (15) a. $\begin{array}{c} N \\ \swarrow \quad \searrow \\ N (= \text{OBJ}) \quad N \end{array}$ b. $\begin{array}{c} N \\ \swarrow \quad \searrow \\ N (= \text{no F}) \quad N \end{array}$

- (16) a. $\begin{array}{c} \text{SUBJ} \quad \text{OBJ} \\ | \quad | \\ \text{devour: (Agent, Theme)} \end{array}$

- b. $\begin{array}{c} \text{SUBJ} \quad \text{OBJ}/\phi \\ | \quad | \\ \text{eat: (Agent, Theme)} \end{array}$

- (17) a. $\begin{array}{c} \text{SUBJ}/\phi \quad \text{OBJ} \\ | \quad | \\ \text{devouringN: (Agent, Theme)} \end{array}$

- b. $\begin{array}{c} \text{SUBJ}/\phi \quad \text{OBJ}/\phi \\ | \quad | \\ \text{eatingN: (Agent, Theme)} \end{array}$

Selkirk (同書: 36-38) は, さらに, 概ね“主語以外の文法項は, 動詞 (から派生した名詞) の第一次投射の中で満たされなければならない”という「第一次投射の条件」(The First Order Projection Condition) と呼ばれる下の (18) を提案し, (19a) - (19b) の非文法性を説明しようとしている。

(18) *The First Order Projection Condition (FOPC)*

All non-SUBJ arguments of a lexical category X_i must be satisfied within the first order projection of X_i .

- (19) a. *tree $\left\{ \begin{array}{l} \text{devouring} \\ \text{eating} \end{array} \right\}$ of pasta (pasta = Theme)
 b. *pasta tree eater (pasta = Theme)
 c. tree pasta eater (pasta = Theme)

(18) の条件によれば, 第一次投射は, (19a) では [tree devouring/eating], (19b) では [tree eater], (19c) では [pasta eater] となり, (19a) と (19b) では pasta は第一次投射の中で満たされていないので条件に違反し非文法的となるが, (19c) では第一次投射の中で満たされているので条件に合い文法的となる, というように説明される。

しかしながら, Selkirk の分析にもいくつか問題がある。まず, 彼女の対象とする動詞由来複合語は, 既に見たように, 動詞から派生する名詞が主要部となる複合名詞に限られるため, 上に挙げた (3) の II. A 1・A 2 の drinking-water, reading material, flashlight, stop-watch や (7) の V. A・B の flash-card, dodge-ball, pushbutton, eating apple, chewing gum, spending money, whipping cream

のような動詞に由来する名詞が主要部の位置(右端)にこない複合名詞については対象外ということになってしまう。

次に、“語彙項目のSUBJ文法項は複合語構造では満たされないこともある”としてSelkirk(同書:34)は下の(20)を挙げているが、そもそも(18)の条件は主語以外の文法項についてのものであるため、(18)の条件では(20)は説明できない。というのも、派生名詞の基体動詞(swim, eat)は非能格動詞(unergative verb)と呼ばれ、外項(girl, kid(=主語))のみを持つからである。⁹⁾

(20) a. *The hours for [girl swimming] at this pool are quite restricted.

b. *[Kid eating] makes such a mess.

一方、下の(21) - (22)の場合は、派生名詞の基体動詞(fall, break, quake, fail, grow)は非対格動詞(unaccusative verb)と呼ばれ、内項のみを持つ。つまり、(21)のleaf, glass, (22)のearth, rainなどは外項ではなくて、内項ということになり、構造的には“non-SUBJ argument”とも考えられるため文法的であると誤った予測をしてしまうことになる。¹⁰⁾

(21) a. *[Leaf-falling] makes a big mess.

b. *[Glass-breaking] can be caused by sound waves.

(22) *earth quaking, *rain falling, *heart failing, *population growing

4. 特質構造(Qualia Structure)を用いた分析

Johnston and Busa(1999)は、動詞由来名詞や動詞的名詞のような動詞と関連する名詞を含む複合名詞も含めて、包括的に複合名詞の構成要素の語彙情報に基づいて要素間の関係を表示しようとしている。彼らは、Pustejovsky(1995)で提案された生成レキシコンの理論を取り入れ、語彙項目の意味内容は基本的には(23)のように表示されるとしている。

$$(23) \left[\begin{array}{l} \alpha \\ \text{TYPESTR(タイプ構造)} = [\text{ARG1} = \text{the type of } \alpha] \\ \text{ARGSTR(項構造)} = [\text{D-ARG1} = \text{other arguments in the qualia}] \\ \text{EVENTSTR(事象構造)} = [\text{E1} = \text{events in the qualia}] \\ \text{QUALIA(特質構造)} = \left[\begin{array}{l} \text{FORMAL(形式役割)} = \text{isa-relation} \\ \text{CONSTITUTIVE(構成役割)} = \text{parts of } \alpha \\ \text{TELIC(目的役割)} = \text{purpose of } \alpha \\ \text{AGENTIVE(主体役割)} = \text{how } \alpha \text{ is brought about.} \end{array} \right] \end{array} \right]$$

さらに、JohnstonとBusaは、複合名詞の構造は下の(24)で示されるように、主要部の意味内容(CONTENT)①が複合名詞に継承され、その意味内容の中にさらに修飾名詞の意味内容②が組み込まれる構造になると考えている。より具体的には、(25)に見るように、特質構造の中の主要部rifleの目的役割の中に修飾名詞hunting(正確にはhunt)が組み込まれた構造ということになる。¹¹⁾

$$(24) \left[\begin{array}{c} \text{MODIFIER NOUN} \\ \text{ORTH} = \beta \\ \text{CAT} = \text{N} \\ \text{CONTENT} = \textcircled{2} \end{array} \right] \left[\begin{array}{c} \text{HEAD} \\ \text{ORTH} = \alpha \\ \text{CAT} = \text{N} \\ \text{CONTENT} = \textcircled{1} \end{array} \right] \Rightarrow$$

COMPOUND

$$\left[\begin{array}{l} \text{ORTH} = \beta \alpha \\ \text{CAT} = \text{N} \\ \text{CONTENT} = [\textcircled{1} = [\text{ARGSTR} = [\text{D-ARG1} = \textcircled{2}]]] \end{array} \right]$$

hunting rifle

$$(25) \left[\begin{array}{l} \text{TYPESTR} = [\text{ARG1} = \textcircled{x} \text{ rifle}] \\ \text{ARGSTR} = \left[\begin{array}{l} \text{D-ARG1} = \textcircled{w} \text{ human} \\ \text{D-ARG2} = \textcircled{z} \text{ prey} \end{array} \right] \\ \text{QUALIA} = \left[\begin{array}{l} \text{FORMAL} = \textcircled{x} \\ \text{activity_lcp} \\ \text{TELIC} = [\text{TELIC} = \text{hunt}(\textcircled{w}, \textcircled{z})] \\ \text{AGENTIVE} = \text{fire}(\textcircled{w}, \textcircled{x}) \end{array} \right] \end{array} \right]$$

JohnstonとBusaのこの提案は、William(1981)で提案された右側主要部規則を前提としているため、構成要素の種類に関係なく常に複合名詞の第1要素の意味内容を第2要素(主要部)の意味内容に組み入れるという形になっているが、これには大きな問題がある。まず、例示されている複合名詞hunting rifleでは、たまたまrifleの目的役割をhuntingだと特定するのが容易であるため、rifleとhuntingの関係を捉えることができるが、既に見たdrying oil, howling monkey, dance team, glowworm, turntableなどにおいては、構成要素間の関係を主要部の特質構造(特に目的役割)に基づいて特定するのは困難である。

さらに、hunting rifleの場合は、主要部がrifleという「モノ名詞」¹²⁾であり、しかも目的役割の特定も比較的容易であるが、既に見たpopulation growth, hay-making, house-cleaning, shoe-maker, record-

player, mail delivery, life insurance など多くの場合においては、第2要素（主要部）が動詞に由来する名詞であるため、特質構造（とりわけ目的役割）を表示するのは非常に難しくなる。このままだと Johnston と Busa の枠組みでは、動詞に由来する名詞を含む複合名詞の構成要素間の関係を捉えることは不可能だと言えよう。

5. 基体動詞の語彙特性に基づく提案

上では、いくつかの代表的な提案および分析を取り上げて論じた。この章では、基体動詞の語彙特性という観点から、それぞれの提案や分析について指摘した様々な問題点を解決する方法を提示してみたい。まず、Roepers and Siegel (1978), Selkirk (1982) などに従い、動詞に由来する名詞は、動詞の語彙特性（の一部）を継承すると仮定して、動詞に由来する名詞の語彙情報にその基体動詞の語彙特性が記載されるものとする。一般には、動詞の語彙情報には語彙的音韻表示、語彙的統語表示、語彙的意味表示の3つが含まれるが、ここではこれらのうち、語彙的統語表示としての項構造（argument structure）と語彙的意味表示としての語彙概念構造（lexical conceptual structure）の二つを扱うことにする。

項構造については、Rappaport and Levin (1988) の表記の仕方¹³⁾を採用して、例えば kick の項構造を (26) のように表すことにする。(<>の外側にある *x* は外項を、<>の内側にある *y* は内項を表す。)

(26) KICK: $x < y >$

さて、ここで、動詞の語彙特性の中で内項についての情報は派生名詞にも継承されると仮定して、Roepers and Siegel (1978: 208), Selkirk (1982: 37), 影山 (1999: 129) などの線に沿ってひとまず (27) のような内項条件を設けておくことにする。

(27) 内項は、そして内項のみ、複合名詞の中に投射されなければならない。

(27) は、動詞に由来する名詞を含む複合名詞は、基体動詞の規定する主題役割と密接な関係があることを示すものである。

ここで、以下の例文を見てみよう。¹⁴⁾

- (28) a. There's altogether too much [church going] around here.
b. [Book buying] is on the decline.
c. Some prefer [gift giving] to [gift receiving].

(28) では、[] で括ってある複合名詞の第1要素は、いずれも内項 (a. Goal, b. Theme, c. Theme/Source) であり、(27) の内項条件を満たしているため文法的となっている。

次に、Selkirk (上掲書) にとって問題であった (20) - (21) ((29) - (30) として下に再録) をもう一度見てみよう。

- (29) (= (20)) a. *The hours for [girl swimming] at this pool are quite restricted.
b. *[Kid eating] makes such a mess.
(30) (= (21)) a. *[Leaf-falling] makes a big mess.
b. *[Glass-breaking] can be caused by sound waves.

(29) と (30) の派生名詞の基体動詞の項構造は、それぞれ (31a), (31b) のように表されるので、(29) については (27) の内項条件で正しく説明できる。しかし、(30) については、leaf や glass は内項であるため、(27) の内項条件は (30) を文法的だと誤って予測してしまう。このような事実を説明するには、もう少し厳しい制限を課す必要がありそうである。そこで、現段階としては、派生名詞が複合名詞を構成するには、派生名詞の基体動詞は下の (32) のような項構造（つまり他動詞と同じ項構造）を持たなければならない、かつ (33) の内項条件を満たさなければならないと提案しておく。

- (31) a. $x < >$
b. $< y >$

(32) $x < y >$

(33) 外項と内項がある場合、そしてその場合に限り、内項のみ複合名詞の中に投射されなければならない。

次に、語彙概念構造について触れることにする。語彙概念構造は、Jackendoff (1983), Jackendoff (1990) などによって展開されたもので、動詞の概念的意味を明示しようとしたものと捉えることができる。例えば、drink の語彙概念構造は下の (34) のように表示される。¹⁵⁾

- (34) drink
[Event CAUSE ([Thing]_i, [Event GO ([Thing LIQUID]_j, [Path TO ([Place IN ([Thing MOUTH OF ([Thing]_j)])))]))]]]

上の語彙概念構造は、簡単に言えば、“cause a

liquid to go into one's mouth"を意味している。なお、表示の形式は統一されている訳ではなく、Jackendoff (1990) のように、いわゆる選択制限 ((34) では指標 j の付与された LIQUID) も語彙概念構造に記載すべきだとする提案もあるが、ここではこれに関しては触れないことにする。

さて、例えば drinking-water における drinking は、drink に由来する派生名詞ではあるが名詞であるため、既に § 4 で見た特質構造という考え方を取り入れるのは有効である。さらに、drinking が drink から派生されるということは、出所が drink であると考えられるため、特質構造の中の主体役割の項目に drink の語彙情報が記載されることになる。この場合、drink (一般的には基体動詞) の語彙情報とは、既に述べたように、項構造と語彙概念構造の二つである。

次に、動詞に由来する名詞を含む複合名詞の構成要素間の関係を捉えるメカニズムについて考えることにする。この問題は、見方を変えれば、複合名詞の生産性の問題とも密接に関係するので、§ 4 で論じた Johnston and Busa (1999) の提案のうち、(24) ((35) として下に再録) のような複合名詞の生産メカニズム (あるいは解析規則) を取り入れることにする。

$$\begin{array}{c}
 \text{(35) = (24)} \quad \begin{array}{c} \text{MODIFIER NOUN} \\ \text{ORTH} = \beta \\ \text{CAT} = \text{N} \\ \text{CONTENT} = [2] \end{array} \quad \begin{array}{c} \text{HEAD} \\ \text{ORTH} = \alpha \\ \text{CAT} = \text{N} \\ \text{CONTENT} = [1] \end{array} \Rightarrow \\
 \begin{array}{c} \text{COMPOUND} \\ \text{ORTH} = \beta \alpha \\ \text{CAT} = \text{N} \\ \text{CONTENT} = [1] = [\text{ARGSTR} = [\text{D-ARG1} = [2]]] \end{array}
 \end{array}$$

(35) は、主要部 α の意味内容 (CONTENT) [1] が複合名詞に継承され、その意味内容の中にさらに修飾名詞 β の意味内容 [2] が組み込まれることを規定したものである。Johnston and Busa (上掲書) にとって問題であった population growth, hay-making, house-cleaning のような主要部 α が派生名詞である場合には、上で提案したように (派生名詞の基体動詞の) 項構造は主体役割に記載されていることになり、もし内項があればその内項は β に特定されることになる。一方、drying oil, howling monkey, drinking-water のような場合については、主要部 α の意味内容 [1] の中に修飾名詞 β の意味内容 [2] が組み込まれた後で、下の (36) の矢印で示されているように、逆方向に再び主要部 α の意味内容 [1] が修飾

名詞 β の意味内容 [2] の中に組み込まれることを提案したい。具体的には、 β の特質構造の中の主体役割に記載されている内項が α に特定されると考える。この点は、瀬田 (2006) で論じた派生名詞を含まない複合名詞の場合とは大きく異なる。このことから、派生名詞を含む複合名詞の構成要素間の関係は、派生名詞の基体動詞の語彙特性によって決定されると言えよう。

$$\begin{array}{c}
 \text{(36)} \quad \text{COMPOUND} \\
 \left[\begin{array}{l} \text{ORTH} = \beta \alpha \\ \text{CAT} = \text{N} \\ \text{CONTENT} = [1] = [\text{ARGSTR} = [\text{D-ARG1} = [2]]] \end{array} \right]
 \end{array}$$

ところで、以下の例を見てみよう。¹⁶⁾

- (37) a. *bee-stinging
 b. *dog-biting
 (38) a. a bee sting, bee stings
 b. a dog bite, dog bites
 (39) *rain-falling, *heart-aching, *bus-stopping
 (40) rainfall, heartache, bus stop

(38) や (40) の例は、動詞的名詞、つまり転換による派生名詞を含み、「根複合語」(root compound) と呼ばれることもあるが、上で提案した (33) の内項条件の反例となる。というのは、(38) は外項が複合名詞の構成要素となっている例で、(40) は内項が複合名詞の構成要素となつてはいるが基体動詞が非対格動詞であり外項を欠いているからである。しかしながら、(37) や (39) との比較からも分かるように、動詞的名詞の場合は基体動詞の項構造についての情報が継承されていない可能性が高い。これは、例えば、下の (41a) では baking が文法項を取り得る (従って John が baking の文法項 (の一つ) をコントロールすることが可能) が、(41b) では bakings は文法項を持たない (従って John のコントロールは不可能) という Grimshaw (1990: 69-70) の指摘からも裏づけされるように、一般に building (建物), creation (創造物), publication (出版物) のような結果・産物を表すモノ名詞についても言えることである。

- (41) a. John enjoys clam baking.
 b. John enjoys clam bakings.

以上より、動詞的名詞を含む複合名詞 (根複合語) は、本来の名詞 (つまり派生されたものではない名

詞)で構成される複合名詞と同列に扱い、動詞由来名詞を含む複合名詞とは区別して考えなければならぬと結論できる。

さて、ここで、§ 2.2 で言及した Levi (1978) の Act と Product の区別について触れておくことにする。上で見たように、同じ動詞由来名詞でも amending と amendment で解釈が異なることを説明するためにも、Act と Product のような区別はなんらかの形で語彙項目の中に記載しておく必要があることは確かである。これに関して、Pustejovsky (1995: 169ff.) は、arriving と arrival の違いや、同じ construction でも 3 通りの解釈が可能であることなどを説明するために、語彙項目の中の事象構造 (上の (23) を参照) に process と state を指定することを提案している。また、影山 (1999: 101-107) は、特質構造の中の形式役割に event (デキゴト名詞の場合) と thing (モノ名詞の場合) を指定することを提案している。どちらの提案が妥当であるかの議論は別の機会に譲るとして、今の段階では、いずれにしてもこのような線に沿った枠組みは有効であると思われる。

最後に、動詞由来名詞を含む複合名詞の意味の問題について見ておくことにする。まず、以下の例を考えてみよう。¹⁷⁾

(42) truckdriver, cropduster, icebreaker, homemaker

Roeper and Siegel (1978: 216) によると、(42) の例は一般的な意味 (つまり合成的な意味) の他に、特殊な意味としても用いられる。例えば icebreaker は、一般に氷を砕くものを意味すると同時に、砕氷船やパーティーなどで話の口火を切る人を意味する。これは、瀬田 (上掲書) で論じられているように、語彙化と深い関係がある。基体動詞の項構造に由来する厳しい制約の下で、動詞由来名詞は他の名詞と生産的に複合する。しかし、そのようにして形成される複合名詞が一般的な意味を失い、特別な意味の複合名詞として慣例化する、つまり語彙化する場合は、複合名詞は複合名詞の形として独自に語彙目録に登録され、従って学習されることになる。¹⁸⁾

6. 結 語

本稿では、動詞に由来する派生名詞を含む複合名詞について、主に複合名詞の構成要素間の関係を中心に論じてきた。複合名詞の構成要素である派生名詞は、動詞に由来するため必然的に基体動詞の語彙特性を継承すると仮定し、基体動詞の項構造に基づ

く内項条件を提案し、動詞に由来する派生名詞と他の名詞の複合の可能性について考察した。その結果、動詞に由来する派生名詞でも、接辞の付加を伴う動詞由来名詞と接辞の付加を伴わない転換により派生される動詞的名詞では、複合名詞形成に関してはその振る舞いが違うことを見た。結局、動詞的名詞を含む複合名詞は、本来の名詞 (つまり派生されたものではない名詞) で構成される複合名詞と同等に扱い、動詞由来名詞を含む複合名詞は、別枠で扱わなければならないという結論に達した。また、動詞由来名詞を含む複合名詞の可能性の問題は、生産性の問題でもあるという観点から、Johnston and Busa (1999) の枠組みに新たな提案を組み入れ、動詞由来名詞を含む複合名詞の生産メカニズムとも言えるモデルを提示した。

注

- 1) Quirk *et al.* (1985: 1567) は複合語を「二つ以上の語基 (base) から成る語彙的単位 (lexical unit)」と定義している。
- 2) “compound noun” という用語は Zandvoort (1975: 277) によるが、この用語には第 1 要素が名詞以外のものも含まれている。なお、Adams (1973) や Quirk *et al.* (1985) などは “noun compound”, Lees (1960, 1970) は “nominal compound” という用語をそれぞれ用いている。また、動詞的名詞は、転換 (conversion) と呼ばれる語形成過程によって派生される派生名詞とも言われる。
- 3) 最も重大な問題は、このような分類による方法では複合名詞が生産的であることが説明できないという点である。詳しくは Levi (1978: 105) を参照。
- 4) Hatcher (同書: 367) は、さらに、(4) の関係を “漠然とした融通性のある” (vague and elastic) 関係とした上で、構成要素間のより具体的な関係 (sub-relation) を捉えるためにはそれぞれの要素の指示 (reference) に言及する必要があるとして、名詞を次の 7 つに分類することを提案している。
 - (i) 1. Person 2. Animal
 3. Concrete Object, Substance, Condition
 4. Place 5. Time 6. Activity
 7. Miscellaneous Abstract Entities

しかしながら、この提案は、二つの構成要素間の関係は $7 \times 7 = 49$ タイプの場合において特定されなければならないと主張しているだけで、より具体的な関係を捉えるための提案とは言い難い。さらに、Hatcher 自身も認めているように、名詞の分類に関しては Object と Place の区別、

- $$\begin{array}{c} \text{V} - \text{O} - \text{I} \rightarrow \text{N}_2 \\ \quad | \quad | \\ \quad \text{N}_1 \quad \text{N}_2 \end{array} \quad \text{V-s} \quad \text{N}_1 \rightarrow \text{N}_2 + \text{N}_1$$

- 藤・杉岡(2002: 50)からの引用。ただし、(21)の「 」は筆者による。

- 伊藤たかね・杉岡洋子 (2002) 『語の仕組みと語形成』 研究社, 東京.
- Jackendoff, Ray S. (1983) *Semantics and Cognition*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Jackendoff, Ray S. (1990) *Semantic Structures*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Jespersen, Otto (1909-1949) *A Modern English Grammar on Historical Principles (MEG)*, Volumes I - VII, George Allen & Unwin, London; Ejnar Munksgaard, Copenhagen.
- Johnston, Michael and Federica Busa (1999) "Qualia Structure and the Compositional Interpretation of Compounds," *Breadth and Depth of Semantic Lexicons*, ed. by Evelyn Viegas, 167-187, Kluwer Academic Publishers, Dordrecht.
- 影山太郎 (1999) 『形態論と意味』 くろしお出版, 東京.
- 影山太郎・由本陽子 (1997) 『語形成と概念構造』 研究社, 東京.
- Lees, Robert B. ([1960] 1966) *The Grammar of English Nominalizations*, Indiana University, Bloomington; The Hague, Mouton & Co.
- Lees, Robert B. (1970) "Problems in the Grammatical Analysis of English Nominal Compounds," *Progress in Linguistics*, ed. by Manfred Bierwisch and Karl E. Heidolph, 174-186, Mouton, The Hague.
- Levi, Judith N. (1978) *The Syntax and Semantics of Complex Nominals*, Academic Press, New York.
- Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav (1995) *Unaccusativity: At the Syntax-Lexical Semantics Interface*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Perlmutter, David M. (1978) "Impersonal Passives and the Unaccusative Hypothesis," *BLS* 4, 157-189.
- Pustejovsky, James (1995) *The Generative Lexicon*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman, London and New York.
- Rappaport, Malka and Beth Levin (1988) "What to Do with θ -Roles," *Syntax and Semantics* 21: *Thematic Relations*, ed. by Wendy Wilkins, 7-36, Academic Press, San Diego.
- Rappaport Hovav, Malka and Beth Levin (1992) "-er Nominals: Implications for the Theory of Argument Structure," *Syntax and Semantics* 26: *Syntax and the Lexicon*, ed. by Tim Stowell and Eric Wehrli, 127-153, Academic Press, San Diego.
- Roeper, Thomas and Muffy E.A. Siegel (1978) "A Lexical Transformation for Verbal Compounds," *Linguistic Inquiry* 9, 199-260.
- Selkirk, Elisabeth O. (1982) *The Syntax of Words*, MIT Press, Cambridge, MA.
- 瀬田幸人 (2006) 「英語の複合名詞についての一考察」『言語科学の真髄を求めて—中島平三教授還暦記念論文集—』 ひつじ書房, 東京.
- Williams, Edwin (1981) "On the Notions 'Lexically Related' and 'Head of a Word'," *Linguistic Inquiry* 12, 245-274.
- Zandvoort, R.W. (1975) *A Handbook of English Grammar*, 7th edition, Longman, London.
- Zimmer, Karl E. (1971) "Some General Observations about Nominal Compounds," *Working Papers on Language Universals*, Stanford University 5, C1-C21.
- Zimmer, Karl E. (1972) "Appropriateness Conditions for Nominal Compounds," *Working Papers on Language Universals*, Stanford University 8, 3-20.